

関生弾圧粉碎の総決起集会！

11・1日比谷野音へ大結集を訴えます



関生弾圧を考える神奈川の会を結成

9月10日、「関生弾圧を考える神奈川の会」を結成しました。90人が参加し、関生支援を通して、関生運動から学び、労働運動の再生・発展を実現するとの決意を固め、反転攻勢の一步を踏み出しました。

昨年来、基調報告をした高梨晃嘉さん(共同代表/共同行動のためのかながわアクション代表世話人)と共に『棘』上映を取り組みました。コロナの影響で延期となり8か月ぶりの結成総会となりました。

開催あいさつでは原田章弘さん(共同代表/朝鮮人強制連行真相調査団・協同代表)は、関生支援を通して労働運動の復権を訴えました。

基調報告では「差別と分断のない職場・地域づくりのために、労働と現場の実態、地域の実情とそこでの闘いに学び、労働運動の復権(再構築)に取り組み」と提起しました。

武谷さんの訴え

関生支部の武谷書記次長は、関生支援の輪が全国に広がった成果として武委員長と湯川副委員長を奪還したこと、労働委員会勝利命令や仮処分勝利命令が続き、反転攻勢に転じたことが報告されました。武谷さんの具体的な話で「関生支部のことが良くなる

かった」という感想がいくつも寄せられました。

狭間産業と言われ生コン業界で武委員長たちが労働組合をつくったのが1965年。協同組合運動は80年代に、05年の経営側の裏切りなどを乗り越え、ついに15年に160企業が大阪広域生コン協同組合に入ったのです。今回の弾圧はこの画期的な産別運動に対する歴史的弾圧です。

新鮮だったのは、80年代当時、中小零細企業ばかりの生コン業界で退職金などない時代に、基金を作って退職金を出し、老人ホームを作り産別年金を設立するなど福利厚生活動も進めてきたことです。まさに労働運動の原点です。

武谷さんは最後に「当事者として弾圧を粉碎し勝利まで闘う。無罪判決をかちとるために全力を尽くすと共に、組織拡大と現場行動を実践し、最終的には大衆行動で決着をつける。引き続きの支援をお願いします」と訴えました。

労働運動の再生を

連帯あいさつでは、小原慎一さん(神奈川平和運動センター関西生コ

ン労組を支援する会)副代表)が協力し共に闘う決意を述べました。

杉浦弘子さん(ドキュメンタリー映画『棘』監督)は「武委員長が映画を観たのが気がかり。『棘』の上映会を全国各地に広げよう」と呼びかけました。

労働運動の現場からの発言では、合同労組かながわが「コロナ禍の休業補償を100%獲得した」、郵政労働者が「関生運動を学び、それを実践して労働現場に活かしたい」と発言しました。

最後に、役員提案が満場一致で承認されたあと、総会のまとめとして、品川孝司さん(結成準備委員会・事務局)が「関生支援を通して、労働者と市民の連帯と国際連帯の力で差別・分断のない社会を作ろう」と呼びかけました。

船木明貴さん(共同代表/改憲・戦争阻止!大行進神奈川呼びかけ人)は「団結とは、自分だけが良い子になろうとして一人ひとりが競争しないこと」とある労働組合の議案書の記述を紹介し、「団結ががんばろう」を全員で唱和して大成功のうちに総会を終りました。